



《11の子と歩む》

こんな人生もすてたもんじゃないねえ

「弟に障害があるって友だちに言った瞬間の、あの『間』が嫌なんだよねえ」
姉いわく、障害児一家が意外と楽しく暮らしている。とは、なかなか思ってもらえないそうです。私たちにしてみれば、「そうだった！うちの子も障害児だった！」という感じですよ。2015年の春、翔陽は養護学校の高等部に入学しました。振り返ると、彼とともに過ごしてきたことで、私も世間一般の「子育て」から開放されていったように思います。

◆一変した生活

最初は、子育ての本を見たり、おばあちゃんが言うようにやってみたり、私もそんな母親でした。しかし、お姉ちゃんが「ほんやり」系で、そのくせ「やりたいことは怒られてもやる」「嫌なことは頑としてやらない」、という徹底ぶりでしたので、私には子育てが向いていないんじゃないかと思っていました。第二子がお腹にいるとわかったときに誓ったことは、「今度はもっとまじめに育てよう」でした。
なんとということでしょう。そこに生まれたのが翔陽でした。

翔陽が歩けるようになると、わが家は一変しました。破壊と再生、逃走と追跡のくり返しです。壁紙はめくられ、棚は倒される。電化製品は箱から出した途端に破壊される。出ているものはとくに破壊されている。片づけているスキに家から抜け出す。しかも服もすぐ脱ぐので、オムツ姿！ご近所のおばあちゃんにこっぴどく叱られたこともありました。

保育園入園後は、一日として園で最後まで過ごせたことはありませんでした。保育園でも大変だったのか、9時に送っていくと、毎日のように9時半には「熱があるので迎えにきてほしい」と電話がありました。しまいには、保育園のそばにある、歩道橋を見ただけでも大声で泣きわめくようになりました。

いろいろな方に相談しましたが、「男の子だから」と笑い飛ばされました。そんな時、買い物中の翔陽を見た友人が、知り合いに相談してくれました。

「自閉症じゃないかな…」

調べてみれば、次々と当てはまります。言葉が遅い。走り回る。視線は合わせるけれど、音の反響が怖くてお姉ちゃんとお風呂に入れない。ああ。もっと早く知っていたら…。
障害がわかったのは、3歳11カ月のときでした。

——なんだ。私が間違ってたわけじゃないんだ。児童相談センターからの帰り道、見上げる
とまぶしかった木漏れ日は、きつと忘れない。育て方を変えたらいいんだ、と希望に満ちた想
いは今でも思い出せます。

*

その後、保育園をやめて、市立の療育園に通うことにしました。しかし2カ月が過ぎ、通園と仕事の両立で私が倒れたので、母子分離の療育園を紹介していただきました。

療育園では、ものを作る楽しみや音楽に触れるよろこびに出会い、内より、友だちと追いか
けっことができるようになりました！その生活が彼に合っていたのか、いつの間にか泣きわめ
くこともなくなりました。

今思えば、歩道橋を見ると泣いていたのは、「パニック」と呼ばれるものだったんだと思